

## 分科会A (歴史・政治)

テーマ：廖承志と中国の対日「工作」

司会者：王雪萍（東京大学教養学部）

報告者：大澤武司（熊本学園大学外国語学部）

「戦後日中民間人道外交と廖承志集団—中国外交部档案浅析」

山影統（早稲田大学非常勤講師）

「廖承志集団と戦後日中経済関係の構築」

井上正也（香川大学法学部）

「日本にとっての廖承志集団の対日「工作」」

コメンテーター：杉浦康之（防衛省防衛研究所）

吉田豊子（京都産業大学外国語学部）

趣意書：

本分科会の目的は、中華人民共和国（以下、中国）の対日政策の策定・実行過程における日本専門家集団の役割を、廖承志と彼の下で活躍した対日工作者に焦点を当て解明することである。廖承志は1952年に対日政策担当者に指名されて以来、文革中の一時期を除いて1983年に亡くなるまで、毛沢東、周恩来らの指示の下で実務レベルの業務を総括していた。その廖承志の下には、多数の日本専門家が組織横断的に集まり、対日工作に従事していたが、それらは（1）戦前日本に留学し、建国以前から中国共産党の対日工作に従事していたもの、（2）建国以後日本から帰国し、対日工作に従事したもの、（3）建国以後国内の教育機関で日本語教育を受け、卒業後対日工作に従事したものに大別される。本分科会は、利用可能となった中国の档案史料や公刊資料に加え、現在存命中関係者に対してオーラルヒストリーを実施し、これら対日工作者の役割を実証的に検証する。そして、こうした実証研究を踏まえて、民間アクターを利用して対日政策を展開した廖承志集団により構築された戦後日中関係に対して、彼らが残した「遺産」を検証する。日中関係が大きな変容を迎えている現在、両国の間を結ぶ「コミュニケーター（伝達者）」の不在が指摘されていることに鑑みれば、本分科会は単に実証的な歴史研究に留まらず、現状の問題の解決に対する一視座をも提供するものと思われる。大澤武司会員は「戦後日中民間人道外交と廖承志集団—中国外交部档案浅析」をテーマに報告し、山影統会員は「廖承志集団と戦後日中経済関係の構築」をテーマに報告する。大澤報告と山影報告の中国の視点からの報告に対して、井上正也氏は日本外交史の視点から「日本にとっての廖承志集団の対日「工作」」をテーマに報告する。

三名の報告者の報告に対して日中関係の立場から杉浦康之氏と広く国際関係の立場から吉田豊子氏の両氏にコメントしていただきます。

## 分科会B (経済)

### テーマ：農林業における中露経済関係

座長：辻美代（流通科学大学総合政策学部）

報告者：辻美代「黒龍江省の木材産業とロシア産木材について」

高屋和子（立命館大学経済学部）

「中国の農業政策と対ロシア農業投資—黒龍江省を中心に」

堀江典生（富山大学極東地域研究センター）

「ロシア極東地域農業と中国人労働者」

コメンテーター：加藤弘之（神戸大学大学院経済学研究科）

### 趣意書

中国の高度経済成長持続には、その活力を沿海部から内陸部・東北部へと波及させる必要があった。そのため、政府は21世紀に入り、相次いで内陸部開発・東北部開発を打ち出した。中国東北部、とりわけ黒龍江省の経済発展にとっては、3000kmにわたり国境を接するロシアとの経済関係の構築が不可欠である。また、ロシアにおいても、2012年に開催されるウラジオストク APEC にあわせた極東開発が進んでおり、そのためには中国の協力がなくてはならない。

近年、中国人労働者のロシア進出が多くみられ、また、中国からロシアへの直接投資が増えている。このようなロシアにおける中国プレゼンスの拡大により、中国脅威論が台頭してきており、それは今後の中露経済関係強化にとって制約条件となりかねない。

本分科会では、農業および林業に焦点を絞り、中露間における経済関係を考える。報告は中国研究者2名、ロシア研究者1名で構成され、現地調査を踏まえたうえで現状を検証する。